

怒りを伴う道德判断は生得的基盤を持つか

石田 知子

1. 導入

道德についての生得説、すなわち私たちは道德判断に特化した何らかの生まれつきの要素を持ち、それによって道德判断がなされているという考えと、経験主義、すなわち道德に特化した生得的機構は存在せず、道德は学習によって獲得されるという考えの間の論争は、現在でも道德心理学上の重要な問題の一つである。道德に関する経験的研究の近年の目覚ましい発展は、生得説の支持者を増やしているように見える(de Waal 1996, Haidt 2001, 2012, Hauser 2006など)。現在、道德の生得説の名の下で議論されている主要な立場には、道德をチョムスキーの言語生得説によるところの言語になぞらえて理解しようとする道德文法学派(Dwyer 1999, Hauser 2006)や、道德判断において感情が果たす役割を重視する、ジョナサン・ハイトらによる道德基盤理論(Haidt 2001, 2012)がある(植原 2017)。しかしながら、道德に関する経験的研究の蓄積は、必ずしも生得説を支持するわけではない。ジェシー・プリンツ、パトリシア・S・チャーチランド、キム・ステレルニーなどの哲学者は、道德の獲得過程における学習の役割を重視し、経験主義を唱えている(Prinz 2007, 2008, Churchland 2011, Sterelny 2012)。

本論では、ハイトの道德基盤理論を検討することを通じて、道德の生得性の問題を考えたい。彼の理論を取り上げる理由は主に二つある。第一に、経験的研究の蓄積は、前述の通り生得説の追い風となっている。中でもハイトの理論は、哲学のみならず、心理学を含む認知科学などにも大きな影響を与えている。第二に、彼は感情が道德判断に欠かせない要素だと考える感情主義者であるが、近年、感情主義は道德の本質を考える際の有力な選択肢だとみなされている(Prinz 2008, 植原 2017)。その最も重要な理由は、やはり認知科学などの発展により、感情は道德判断に必要な要素だという経験的証拠が蓄積したことである(Blair 1995, Greene et al. 2004など)。つまり、道德生得説を自然主義的に、すなわち経験的証拠を重視しながら検討するならば、感情主義的生得説の代表的論者の一人であるハイトの理論を無視することはできないのだ。

本論では、危害の認知と怒りに注目し、道德の神経基盤が生得的であるかどうかについて議

論したい。後述するように、道徳判断において危害の存在は広く認識されており、また、怒りは典型的な道徳的感情の一つである。なお、以下では「神経基盤」という語は「神経細胞のネットワークの形で主に脳に配線されていると考えられる、道徳的判断のための生物学的基盤」を指すものとし、それが生得的であるかどうかは問わない。本論の構成は以下の通りである。まず、2節でハイトの道徳基盤理論を紹介した後、その妥当性を危害と怒りに焦点を当てて検討する。そこでは、危害の認知と怒りは、ハイトの考える道徳基盤より基礎的な機能を持ちうることを示す。3節では道徳的怒りとそうでない怒りを包括的に説明しうる理論として、怒りの再調整理論を導入する。そして、道徳的怒りとそうでない怒りを明確に区別するのは難しいことを示す。このことは、危害の認知と怒りによる道徳判断に特化した生得的神経基盤が存在すると考えることを困難にする。

2. 道徳の神経基盤を検討する

2-1 ハイトの道徳基盤理論

ハイトによれば、道徳判断は直観を通じて行われる (Haidt 2001, 2012)。すなわち、私たちが道徳判断のきっかけとなるような出来事を認識すると、その種類に応じて特定の道徳的直観が呼び起こされる。それは、典型的には怒りや嫌悪感といった感情だとされる。道徳判断は生じた直観に直結しており、道徳的推論を経ずに下される。例えば、成人が一方的に小さな子どもに暴力をふるっているのを見ると、私たちの多くは怒りを感じる。そしてその怒りのために、成人の行為は道徳的に悪いものと判断される。

ハイトによれば、直観的道徳判断を支えているのは〈ケア/危害〉〈公正/欺瞞〉〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉〈神聖/墮落〉という五つの生得的基盤⁽¹⁾である (Haidt and Joseph 2007, Haidt 2012, Graham et al. 2018)。これらはそれぞれ異なる適応課題を解決するために進化的に構築された生得的なモジュール、すなわち特定の問題を解決することに特化した脳領域だとされる。例えば、〈ケア/危害〉は「子どもを保護しケアする」という課題から生じ、主に思いやり (compassion)、ときに怒り⁽²⁾を通じてそれを達成する。それぞれの基盤にはトリガー、すなわちそれを知覚すると特定の道徳的直観が引き起こされるような出来事や対象がある。例えば〈ケア/危害〉の場合、トリガーは他者の苦痛や苦悩、自分の子どもによって示された何らかの要望などである。

(1) Haidt (2012) では、もう一つの道徳基盤として〈自由/抑圧〉が紹介されているが、Graham et al. (2018) によれば、これは道徳基盤理論を唱える論者の間で広く認められたものというより、追加されるべき道徳基盤の候補の一つである。

(2) ハイトらによる怒りの位置づけには揺れが見られる。1999年の著作では道徳的な怒りは他者への危害によって引き起こされると述べられているが (Rozin et al. 1999)、2012年には〈ケア/危害〉はもっぱら思いやりと関連付けられている (Haidt 2012)。2018年の著作では、〈ケア/危害〉と加害者に対する怒りは「ときどき」結びつくとして述べられている (Graham et al. 2018)。

それぞれの道徳基盤のトリガーが引かれると、出来事に応じた一連の反応が引き起こされる。〈ケア/危害〉のトリガーが引かれた際には、子どもなどの弱者あるいは何らかの危害を被った人の保護や、彼らに対して危害を加える脅威を取り除くための一連の反応が生じる。それぞれの基盤が進化的に形成された際の適応課題に基づいたトリガーはオリジナル・トリガー、形成後に文化を含む様々な要因で各基盤を起動させるようになったトリガーをカレント・トリガーと言う（それぞれの基盤の特徴は表を参照のこと）。

これら五つの基盤の中で、最も道徳とは異質に見えるのは〈神聖/墮落〉であろう。まず、適応課題やオリジナル・トリガーを見ると、この基盤は病原体となりうるものに対する単なる原始的防御反応であると考えられるかもしれない。だが、道徳共同体の支柱となる何か（宗教的なシンボルや特別な場所など）を「神聖なもの」とすることは、大規模な協力が可能な社会を構築する役に立ちうる。そして、神聖さは、「手を触れてはならない」という感覚を生じさせる嫌悪がなければおそらく存在しえない。つまり、〈神聖/墮落〉基盤に特徴的な感情である嫌悪は、その対とも言える神聖さの感情を生み出し、それによって道徳共同体の結束を固めることを可能にしたと考えられる（Haidt 2012）。

また、〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉についても、道徳とは直接関係がないと考える者もいるだろう。ハイトはこれに対し、現代の道徳理論は個人主義的基盤である〈ケア/危害〉〈公正/欺瞞〉、あるいはこの二つに相当するものにのみ焦点を当てているが、それでは道徳の普遍的特徴を捉えることはできないと述べる。この二つを重視することは、現代の西洋化された社会においてリベラルな価値観を持つ者たち——ジョー・ヘンリッチらによってWEIRD（Western, Educated, Industrialized, Rich and Democratic）と呼ばれている（Henrich et al. 2010）——特有の価値観であるが、そのみから普遍的な道徳基盤を論じることは難しい。彼らは人類史のごく

表 五つの道徳基盤（Haidt 2012, Graham et al. 2018をもとに作成）

| | ケア/危害 | 公正/欺瞞 | 忠誠/背信 | 権威/転覆 | 神聖/墮落 |
|--------------|-----------------------------|--------------------|------------------------------------|----------------|---------|
| 適応課題 | 子どもの保護・ケア | 双方向的協力関係から利益を得る | 強固な連帯を形成する | 階級制の下で有益な関係を築く | 汚染を防ぐ |
| オリジナル・トリガーの例 | 苦痛や苦悩・自分の子どもが何らかの要望を示していること | 不正行為・協力・詐欺 | 集団に対する挑戦・脅威 | 支配あるいは服従のしるし | 汚物・病人 |
| カレント・トリガーの例 | 赤ちゃんアザラシ | 配偶者への貞操 | スポーツチーム・国家 | ボス・尊敬を集めているプロ | タブー的な考え |
| 特徴的な情動 | 共感・(怒り) | 怒り (anger)・感謝・罪の意識 | グループに対する誇り・裏切り者に対する激しい怒り (outrage) | 尊敬・怖れ | 嫌悪 |

最近になって登場し、現在でも人類のごく一部を占めるに過ぎないからだ。よって、普遍的な道德を論じるためには、非WEIRDの多くが重視している徳目に関連した共同体主義的な三つの基盤である〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉〈神聖/墮落〉を加える必要がある。

この方針は、道德の進化的起源を考えることでもある程度正当化される。例えば、非血縁者間での協力の進化においては、いかに他者の向社会的行動にただ乗りするフリーライダーを封じ込めるかが重要であるが（Axelrod 1984, Camerer and Thaler 1995 など）、これには〈公正/欺瞞〉だけでなく〈忠誠/背信〉も関係していると考えられる。協力関係の維持が道德に関連することを認めるならば、共同体主義的な道德基盤も必要となるのだ。

この方針は、少なくとも西洋的価値観からは反道德的な社会的慣習だとみなされる風習、例えば月経中の女性を家屋の片隅に閉じ込めて生活させること（大森 1972）などが実は道德的であるという是認しがたい帰結を生じさせるように見えるかもしれない。だが、道德心理学の目的の一つは、生物学的観点から記述倫理学を行うことである（Haidt 2012）。このとき、仮定された道德基盤によって引き起こされている道德判断が、本当の意味で道德的であるかどうかは基本的には問題にならない。そのため、ハイトの五つの基盤に関するふるまいや人間の傾向性が道德の進化的起源に関係があると考えれば、それらが道德的だということを作業仮説として認める必要がある。前述の通り、共同体における協力関係の維持という課題は、道德の領域でありうる。そして、WEIRD的価値観において議論の余地のある三つの基盤、〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉〈神聖/墮落〉は、まさにそのような役割を果たすとされている。よって、以下ではハイトの五つの道德基盤に関する行動や判断は、記述倫理学的な意味で道德的だと仮定して議論する。

2-2 危害と道德判断

それでは、ハイトの想定する道德基盤は、どの程度の妥当性を持つのだろうか。以下では危害の認知が道德判断において果たしている機能を中心に検討しよう。まず、彼は〈ケア/危害〉を主に思いやりと関連付けている。ときに怒りも生じると述べているものの、この基盤と怒りの関係は必ずしも明確ではない（注2も参照のこと）。彼の道德基盤理論では、怒りはむしろ〈公正/欺瞞〉あるいは〈忠誠/背信〉に関連付けられており、前者は非血縁者との双方向的な協力関係の維持、後者は結束力の強い集団を形成するという適応課題を持つ。このように、ハイトの理論においては、各道德基盤に特徴的な感情は存在するものの、各感情は特定の基盤と排他的に結びついているわけではないため、それらの関係は必ずしも一対一ではないように見える。一方で、危害と怒りの間には、ハイトの理論が想定している以上の結びつきがあると考えられる論者もいる。例えば、プリンツは道德的危害によって怒りが引き起こされると考えている（Printz 2009）。以下では、実験的証拠や歴史的事例を通じ、危害と怒りの関係はハイトの想定以上に道德判断において基礎的な役割を果たしていることを示す。

2-2-1 いつ危害は認知されるのか

まず、危害の認知がどのようなときに生じているのか検討しよう。本節では、〈神聖/墮落〉の領域であるような出来事に対しても、危害が認知され、かつそれが道徳的評価と関係がある可能性が高いことを指摘する。

プリンツも述べているように、危害は身体的なものだけに限定されない (Printz 2009)。様々な抽象概念が、精神的な危害に関連している。例えば、少なくとも WEIRD 的な価値観を持つ者は、アウトティング、すなわち本人が公にしていなかった性的指向などを、本人の同意なく暴露する行動は道徳的に悪いと考えている。明らかに、アウトティングは直接的には肉体的苦痛を生じさせない。だが、その道徳的な悪さは、アウトティングされた当事者が感じるであろう精神的苦痛の存在や、プライバシーの権利の侵害という考えによって説明されている。また、社会的拒絶の経験が、身体的痛みの受容に關与する二次性感覚野などの脳部位を活性化すること (Kross et al. 2011) や、鎮痛剤であるアセトアミノフェンが社会的拒絶の苦痛を和らげる効果を持つ可能性があること⁽³⁾ (Dewall et al. 2010) などの経験的証拠も、精神的危害の存在を支持するだろう。

身体的ではない危害は、道徳基盤理論に従えば〈ケア/危害〉以外のモジュールが働いているとされる場面においても認知される。Gray et al. (2014) は、死んだ姉妹の写真を使った自慰行為や屍姦など、ハイトの理論では〈神聖/墮落〉基盤が働くと考えられるような行為 (以下、「不純」な行為とする) を描いたシナリオを使った実験により、表面的には害がない場合⁽⁴⁾でも、それらが被験者によって「道徳的に悪い」と判断される際には、何らかの危害が認知されていることを示した。さらに、時間制限のある中で判断をさせると、危害の程度の見積もりは大きくなる。時間制限は、被験者から熟慮の余裕を奪うため、判断はより直観的になると考えられる。これらの実験結果から、不純とされる行為に対する危害の認知は直観的なものであり、道徳的推論によって後付け的に考え出されたものではないことが示唆される⁽⁵⁾。

(3) この効果は治験すなわち薬剤を医薬品として使用するための臨床試験によって確認されたものではない。そのため、社会的苦痛を和らげる目的でアセトアミノフェンを服用すべきではない。

(4) 彼らのシナリオでは、自らの写真や遺体をそのような行為に使用することについての生前の合意の有無については述べられていない。そのため、この実験における「表面的な害のなさ」とは、「身体的・精神的に傷つく生者がいない」という意味である。したがって、2-2-2で紹介する Gutierrez and Giner-Sorolla (2007) の実験と比較すると、考えられうる危害の排除が十分でない可能性がある。

(5) ただし、彼らの実験では何が危害を受けたのかについては必ずしも明確にされていない。危害の受け手を被験者に答えさせることによって道徳的推論が活性化されることを懸念し、彼らはそのような問いは設けなかった。

また、この実験はもっぱらアメリカ人のみを対象にしているため、被験者に偏りがあることをグレイらは認めている。WEIRDのみを被験者とした実験に基づいた理論は道徳の普遍的特徴を必ずしも捉えることができないというハイトらの批判を考えると、この実験が持ちうる含意はきわめて限定的であるように見えるかもしれない。しかしながら、グレイらの実験では、被験者の支持政党についてのデータも取っており、

不純な行為と危害の結びつきは、アメリカ以外の文化圏でも見出される。インド・オリッサ地方のヒンドゥー教のバラモンは、父親の死後すぐに長男が鶏肉を食べることは道徳的に悪いと考える。ヒンドゥー教徒は、故人の遺族とくに長男は、死者の魂が転生の旅に出ることを助ける必要があると信じているが、彼らによれば鶏肉を食べることはその妨げとなり、父の魂の行方を危機に陥れることになる（Shweder 2012）。すなわち、彼らは父親の魂に危害が及ぶことを心配しているのである。以上より、〈神聖/墮落〉基盤のトリガーを引くような出来事の少なくとも一部では、危害の存在が認知され、その認知は道徳的評価に関係している可能性がある。

2-2-2 危害の認知によって引き起こされる感情は何か

次に、ハイトの理論が示唆する以上に、危害の認知は怒りと結びついていることを示す。Gutierrez and Giner-Sorolla（2007）は、タブーあるいは社会規範に対する違反とそれに伴う他者への危害をとともに含むシナリオと、違反のみを含むシナリオを被験者に読ませ、反応を調べた。それらのシナリオは「生前の合意のある屍姦」など、〈神聖/墮落〉のトリガーが引かれるとされる不純な行為についてのものであった。各シナリオにおいて、実行者はその行為をいかなる他者も身体的・精神的に傷つけずに実行する。その後、シナリオは「他者危害なし」と「他者危害あり」のバージョンに分かれる。前者ではタブー・侵犯的な行為の実行は完全に秘密にされるが、後者では実行者が秘密を漏らしてしまうことで他者が精神的に傷つく⁽⁶⁾。シナリオを読んだのち、被験者は、描かれた行為が実行者以外の他者にとってどの程度有益あるいは有害

リベラル層のみならず保守層も被験者に含まれることが明示されている。保守層はWEIRDが軽視する三つの基盤を重視する傾向があるため、彼らを被験者として含むことは、普遍的道徳を考える上で重要である。さらに、実験では、道徳的な悪さの評価だけでなく、危害の大きさの評価も所属政党と有意に相関していることが示された。すなわち、不純な行為についてのシナリオを「道徳的に悪い」と評価する傾向が高いのは保守政党の支持者であるが、彼らは同時にそのシナリオによって怒りを感じる傾向も、そこに危害を見出す傾向も高かったということだ。〈神聖/墮落〉に関連付けられる不純な行為が、程度の差はあれ政治的立場を問わずアメリカ人に危害の認知を引き起こすということは、ハイトの五つの基盤の妥当性に疑問を生じさせる。

一方、逆の結果が報告されている実験も存在する。Gutierrez and Giner-Sorolla（2007）によれば、タブー・侵犯的なシナリオにおける抽象的な（身体的でない）危害の認知は、道徳判断とは無関係な認知的負荷がないときの方が顕著であった。しかしながら、以下の二点に注意しなければならない。まず、彼らの実験はイギリス・ケント大学の心理学専攻の学生を被験者としていた。これは、被験者の多くがWEIRDであったことを示唆している。そして、危害の認知の有無は「その科学者の行動は彼女以外の人の権利を傷つけたと思いますか」といった質問によって調べられた。この質問自体が直観的判断より熟慮的判断を促すものであること、そしてWEIRD的価値観を持つ者はそもそも不純なシナリオに道徳的悪さを見出しにくいことを考えると、この実験結果の解釈は容易ではないように見える。

(6) 実際には、統制のために「秘密は守るが実行者自身が後悔する」という自己危害のシナリオも準備されていた。

であったか、シナリオによって怒り・思いやり・嫌悪などの道徳に関係する感情をどの程度感じたかなどについて回答した。その結果、他者に対する有害性の評価が高いほど、怒りを感じる程度も大きいことが明らかになった。ハイトによって〈神聖/墮落〉に関連付けられた感情である嫌悪は、怒りより有害性との関連は小さかった。以上より、ハイトの言う〈神聖/墮落〉に関連するシナリオであっても、そこに他者危害の要素があれば、怒りが引き起こされることが分かる。

2-2-1では、〈神聖/墮落〉基盤の領域であるような出来事においても、危害の認知と道徳的評価は相関していることを明らかにした。このことを、本節で指摘した他者危害の認知と怒りの相関と併せて考えると、不純な行為に対する道徳的判断は、嫌悪ではなく危害の認知と怒りによって行われている可能性があることが示唆される。

2-2-3 〈神聖/墮落〉以外の領域における危害の認知と道徳的怒り

それでは、〈神聖/墮落〉以外の領域においては、危害の認知や道徳的怒りは生じるのだろうか。本節では、歴史的な事例から、少なくとも〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉の領域であるような出来事については、危害の認知と道徳的怒りが引き起こされうことを示す。以下では、名誉の文化と呼ばれる社会規範のあり方を紹介する。

名誉の文化は現在でもアメリカ南部を含む一部の地域で色濃く残っているが、以下では、19世紀ヨーロッパの中上流階級の男性によって共有されていた社会規範に注目したい。それは、典型的には軍隊や学生団体の中で学習される規範体系で、名誉の毀損を絶対に許してはならないという価値観によって特徴づけられる（Frevert 2011、以下の説明は彼女に基づく）。どのような行動が名誉の毀損に当たるのかは階級や組織ごとに異なっており、多岐にわたる事項が名誉毀損だとみなされていた。例えば、1815年、プロイセンの使節であったフンボルトは、オーストリア外相メッテルニヒとの会談の際、プロイセンの軍事大臣ボーエンの退席を求めた。ボーエンはこれを侮辱と受け取り、激怒したため、フンボルトは彼と決闘することを余儀なくされている。当時、決闘は名誉を守るために行われ、典型的には、名誉を毀損されたと感じる者の怒りのために実施されていた。つまり、名誉の毀損も何らかの形の危害だと考えられており、その認知は怒りを引き起こしていたのである。

また、名誉のあり方は、男女間で大きく異なっていた。女性の名誉はもっぱら性的な事項にのみ関連付けられており、とりわけ女性の純潔を重視する文化圏においては、婚姻によらない純潔の喪失は名誉を失うことを意味していた。さらに、女性の純潔は、戦時下においては国家の名誉とも結びつけられる。そのため、敵国の男性と関係を持った女性は裏切り者とみなされ、怒りと嘲笑の対象となった（*ibid.*）。例えばフランスでは、第二次大戦終戦直後、ドイツ兵と性的関係を持ったとみなされた女性は、公的な場所で髪を丸刈りにされるという暴力の被害者となっている（平稲 2009）。

ハイトの理論においては、社会的地位にふさわしくないとされる扱いを受けたことで引き起

こされる道徳判断に関係しているのは、階級制を維持するための道徳基盤である〈権威/転覆〉だろう。また、国家に対する裏切り者がトリガーとなる道徳基盤は、〈忠誠/背信〉である。ここで、〈権威/転覆〉に特徴的な道徳感情は尊敬や恐れとされている。そのため、同席すべき（あるいは、少なくとも当人は同席すべきだと考えている）会談のメンバーから外されたことによって生じる怒りは、ハイトの理論では必ずしもうまく説明できない。他方、〈忠誠/背信〉に特徴的なのは、誇りや裏切り者に対する激しい怒りである。よって、ドイツ兵と関係を持ったとされるフランス人女性に対する怒りは、彼の理論においても典型的な道徳的反応である。しかしここで、危害と怒りが直観的な道徳的判断に結びついていると仮定すれば、これら二つを同じ枠組みで無理なくかつ節約的に説明することができる。すなわち、ボイエンは彼の名誉を傷つけられたと感じ、そしてドイツ兵と関係を持ったとされる女性に対する暴力に加担した者は自国の名誉を傷つけられたと感じたため、怒りを覚え、それらのふるまいは道徳的に悪いと判断したのである。

2-2-4 危害の機能

以上、危害の認知とそれに伴う怒りは、〈ケア/危害〉以外の道徳基盤が関与しているとされる事例においても生じていることを確認した。このことは、〈ケア/危害〉以外の道徳基盤が実在していたとしても、それらは危害の認知に基づく道徳判断の基盤と並列できるものではないことを示している。私たちは既に、〈公正/欺瞞〉を除く三つの基盤、すなわち〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉〈神聖/墮落〉に関する道徳的判断が危害の認知と関係していることを確認している。これは、危害と怒りは少なくとも〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉〈神聖/墮落〉よりも基礎的な道徳の神経基盤に支えられていることを意味するように見える（同様の考えについてはGray et al. [2012] を参照のこと）。この考えが正しいならば、〈神聖/墮落〉などの三つの基盤は、道徳的な悪さそのものではなく、どのような種類の道徳違反なのかの認知に関係すると考えられる。

3. 怒りの機能

前節では、危害の認知を伴う怒りは様々な種類の道徳判断で観察されることを確認した。本節では、怒りについての精査を通じ、怒りを伴う道徳判断を支える神経基盤の生得性について考察する。まず、怒りは最も普遍的だと考えられている感情の一つである。それは乳幼児期に出現し（Sternberg and Campos 1900）、文化の違いを超えて存在している（Ekman 1973, Brown 1991）。乳幼児の怒りは、「意地悪をされた」などの道徳に関係する原因でも、「お父さんがおもちゃを買ってくれない」というような道徳とは関係のない原因でも生じうる。成人においても、通常、道徳的な怒りとその他の怒りは区別される（Fessler 2010）。

それでは、怒りはどのような進化的起源や機能を持つのだろうか。怒りの再調整理論（reca-

librational theory of anger) によれば、怒りは、利害の対立を自らの有利になるように調節するという機能を持つ (Sell 2006, Tooby et al. 2008, Sell et al. 2009)。すなわち、人は怒ることを通じて相手が自分に引き受けさせようとしているコストを減らし、それを相手に転嫁しようとしている。この理論によれば、「お父さんがおもちゃを買ってくれない」と怒っている子どもは、怒ることで父親の気持ちを変え、おもちゃを買わせようとしていることになる。この理論からは、相手の行動を自分の有利となるように変えやすい人、すなわちコストの高い行動ができる人 (強い人)、あるいは、何らかの見返りを与える能力の高い人 (魅力的な人) はより怒りやすいと予測されるが、このことは実験的に確認されている (Sell et al. 2009, Price et al. 2012)。例えば、男性において、上半身の筋力の強さと怒りやすさの間には正の相関関係があることが示されている⁽⁷⁾ (Sell et al. 2009)。

この考え方によれば、道徳的な怒りは、「自らの有利になる仕方で利害の対立を解決する」という課題を遂行するために進化した私たちの心的傾向が新しい課題のために転用されて生じるものである (Fessler 2010)。それでは、そのように形成された道徳の神経基盤は、生得的なモジュールだと言えるだろうか。この問題を考えるために、以下では道徳的な怒りとそうでない怒りを明確に区別できるか否かについて検討する。この問いに対して肯定的に答えることができるならば、怒りに関係する道徳判断の神経基盤をその他の怒りの神経基盤から何らかの仕方で区別できる可能性、ひいては道徳に特化した生得的モジュールが存在する可能性が残されている。なぜなら、一般的な怒りの神経基盤が転用されることで道徳的怒りが生じたのだとしても、私たちの祖先が道徳的怒りに関する適応課題に長期間直面していたならば、一般的な怒りの神経基盤から道徳的怒りに特化した基盤が進化的に派生・独立することも可能であるように見えるからだ。他方、道徳的怒りとその他の怒りを明確に区別することができないならば、それらは共通の神経基盤によって支えられていることになり、道徳的怒りに特化した脳領域は存在しないことになる。以下では、道徳的怒りとそうでない怒りを明確に区別するのは難しいことを示し、道徳に特化した生得的神経基盤が存在するという仮説に対する否定的な証拠を提示する。

まず、明確に道徳的ではない怒りとして、以下のような例を考えよう。十分に教育をしてこなかった部下が仕事に失敗したことを、教育不足を棚に上げて叱る上司は、明らかに道徳的ではない理由で怒っている。それでは、次に示す怒りはどうか。外国人技能実習制度は、いわゆ

(7) ただし、この効果は限定的である可能性も指摘されている。プライスらによれば、男性において筋力が怒りやすさに及ぼす効果は、被験者を学部生相当の年齢以下に限定したときのみ観察された (Price et al. 2012)。だが、このことは必ずしも怒りの再調整理論に対する反論にはならない。少なくとも西洋化された現代社会においては、筋力はコストの高い行動ができることと、必ずしも関係がないだろうからだ。運動が得意であることはとりわけ男子のスクールカーストに大きな影響を与え、筋力のある男子学生がコストの高い行動を取ることを可能にしているかもしれないが、そのような効果が学生時代が終わった後にどの程度持続するのかは明らかではないだろう。

る途上国から派遣された実習生に、日本の技能・技術・知識を伝えることを通じた国際協力だとされている。労働力の調整手段としてこの制度を使ってはならないとされているが、実際は安い労働力を得る手段として悪用されるケースが後を絶たない。技能実習生の派遣先の一つに縫製工場があるが、少なくともその一部では、午前八時半から午後十時、遅いときには午前三時までという、超長時間労働が強制されている。経営者は過酷なノルマを課し、達成できないと怒って実習生をさらに働かせようとする（谷 2009, ノーナレ 2019）。

ここで、実習生をこのように扱っているのが例外的に悪質な企業のみであるならば、経営者の怒りは道徳や社会規範とは無関係であるだろう。つまり、彼/彼女の怒りは、自身の教育不足を棚に上げて部下を叱る上司の、理不尽で個人的な怒りと同じ種類のものとなる。しかしながら、残念なことにこのような経営者は例外的な存在とは言えない。安田によれば、縫製業のさかんな岐阜県では、複数の企業が集まって研修生の受け入れ窓口となる協同組合を作っている。縫製業は今や不況業種であり、経営者の一部は生き残りのために実習生を受け入れ、搾取労働に手を染めている（安田 2009）。つまり、一部の縫製企業で横行している搾取的な労働は、経営者個人の問題を越えて、ある種の文化⁽⁸⁾ と言ってもいいものになっている。

それでは、実習生に怒声を浴びせる経営者の怒りは道徳的であるのだろうか？ まず、彼らの怒りがどんなに自分本位に見えようとも、純粋に個人的なものではないことに注意をする必要がある。なぜなら、彼らは実習生を安価な労働力とみなすという悪しき文化の価値観を内面化した上で、実習生が期待された働きをしない（もちろん、その「期待」は身勝手に現実的ではないが）ことに対して怒っているからだ。ここで、彼らの怒りの背後にある種の文化があり、そこには実習生がいかに働くべきかという期待が含まれていることから、道徳（もちろん記述倫理学的な意味である）に通じる萌芽的な社会規範が生じていると考えられる。つまりこの怒りは、道徳に関係のある社会規範を逸脱したときに見られる怒り——例えば、しかるべき会談からの退席の要請を名誉毀損と感じたボイエンの怒りのような——と地続きであるように見える⁽⁹⁾。一方で、実習制度を悪用する経営者の怒りは、道徳的でない怒りとの区別も明確ではな

(8) ここでの「文化」とは、リチャードソンとボイドに従い、「教育、模倣、その他の形態の社会的伝達によって同種他個体から獲得される、個人のふるまいに影響を与えることのできる情報」(Richardson and Boyd 2005, p. 5) であるとする。なお、ここでの「情報」とは、「社会的学習によって獲得または修正され、行動に影響を与える、意識的あるいは無意識的な、あらゆる種類の心的状態」(ibid.) を意味する。

(9) ここで、WEIRD的な価値観から見れば非道徳的な規範であれ、それが「真の」社会規範であるならば、非道徳的な扱いを受けている側もその規範を受け入れている必要があると考える者もいるだろう。この考えが正しいならば、外国人技能実習生たちはそのような不当な労働を認めていないため、実習生を酷使することは社会規範ではないことになる。しかしながら、規範を受け入れている者がいるということが、社会規範とそうでないものを区別する線引き基準であるとは考えにくい。例えば、伝統的な性役割から女性を解放しようとする運動のように、近代以降、伝統的な社会規範に対する反抗は至るところで起こっているが、そのことによってただちに伝統的な性役割が社会規範でなくなるわけではない。

いように見える。実習制度の悪用の場合、怒りの背後には悪しき文化があると考えられるが、そのようなものがなくても、理不尽に部下を叱る上司のように、無理のある要求に応えられない労働者に怒りをぶつけ、搾取しようとする者は存在するだろうからだ。

このように、非道徳的な怒りと道徳的な怒りが明確に区別することのできない連続体を形成しているならば、少なくとも怒りを伴う道徳判断については、その背後に道徳に特化したモジュールがあるという考えは受け入れがたいものとなる。怒りの再調整理論によれば、道徳的怒りは怒りの対象となった相手の行動を変容させるために存在する神経基盤によって実現されている。この基盤が生得的であるならば、道徳は生得的基盤の上に構築されているが、その基盤は道徳専用のものではないことになる。

4. 結論

本論では、ある種の道徳判断を支える神経基盤が生得的か否かという問題を検討した。まず、道徳判断の神経基盤のあり方を明らかにするために、生得説の代表的論者であるハイトの道徳基盤理論を批判的に検討した。その結果、道徳の神経基盤は彼の考えているような五つの生得的モジュールであると言いがたいこと、そして、いくつかの種類の道徳判断において広い範囲で汎用的に使われている、危害の認知と怒りからなる基盤の存在が明らかになった。つまり、ハイトが〈ケア/危害〉〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉〈神聖/墮落〉という四つの基盤によってそれぞれ下されると考えた道徳判断は、危害と怒りの神経基盤によって下されている可能性がある。また、少なくとも〈忠誠/背信〉〈権威/転覆〉〈神聖/墮落〉は、道徳判断そのものではなく、その種類に関係している可能性があることも指摘した。

次に、道徳的な怒りとそうでない怒りを包括的に説明することができる怒りの再調整理論を導入し、道徳的な怒りと非道徳的な怒りを区別することができるかという問いを考えることで、危害と怒りによる道徳判断の神経基盤が道徳に特化した生得的モジュールであるかどうかを検討した。道徳的な怒りと非道徳的な怒りを明確に区別することができないならば、道徳的怒りに特化した生得的基盤の存在が危ぶまれるが、そのような線引きが難しいケースは実際にありうることを示した。以上より、怒りに基づく道徳判断は、怒りの再調整理論によって記述されるような汎用的で生得的な神経基盤を持ちうるが、それは道徳判断のためだけのモジュールではないことが分かる。よって、少なくとも危害と怒りによる道徳判断においては、道徳は経験的に学習されるものとなる⁽¹⁰⁾。

(10) 以上の議論において、〈公正/欺瞞〉基盤によって下されるとされる判断については十分に論じることができていない。これは、WEIRDが特に重視する基盤の一つであり、道徳を考える上で欠かせない平等や公平といった概念と密接に関係している。〈公正/欺瞞〉基盤の生得性や、危害と怒りからなる神経基盤との関係については、今後の課題としたい。

参考文献

- Axelrod, R. (1984) *The Evolution of Cooperation*, Basic Books. (邦訳 ロバート・アクセルロッド (1998) 『つきあい方の科学』, ミネルヴァ書房)
- Blair, R. J. R. (1995) "A Cognitive Developmental Approach to Morality: Investigating the Psychopath" *Cognition* 57: 1-29.
- Brown, D. E. (1991) *Human Universals*, Temple University Press.
- Camerer, C. and Thaler, R. (1995) "Anomalies: Ultimatums, Dictators and Manners" *The Journal of Economic Perspectives* 9: 209-219.
- Churchland, P. S. (2011) *Braintrust: What Neuroscience Tells Us about Morality*, Princeton University Press. (邦訳 パトリシア・S. チャーチランド (2013) 『脳がつくる倫理—科学と哲学から道德の起源にせまる』, 化学同人)
- Dewall, C. N. et al. (2010) "Acetaminophen Reduces Social Pain: Behavioral and Neural Evidence" *Psychological Science* 21(7): 931-937.
- Dwyer, S. (1999) "Moral Competence" In Murasugi, K. and Stainton, R. (eds.) *Philosophy and Linguistics*, Westview Press: 169-190.
- Ekman, P. (1973) "Cross-Cultural Studies of Facial Expression" In Ekman, P. (ed.) *Darwin and Facial Expression: A Century of Research in Review*, Academic Press: 169-222.
- Fessler, D. (2010) "Madman: An Evolutionary Perspective on Anger and Men's Violent Responses to Transgression" In Potegal, M. et al. (eds.) *International Handbook of Anger*, Springer: 361-381.
- Frevert, U. (2011) *Emotions in History: Lost and Found*, The Central European University Press. (邦訳 ウーテ・フレイフェルト (2018) 『歴史の中の感情』, 東京外語大学出版会)
- Graham, J. et al. (2018) "Moral Foundations Theory: On the Advantageous of Moral Pluralism Over Moral Monism" In Gray, K. and Graham, J. (eds.) *Atlas of Moral Psychology*, Guilford Press: 211-222.
- Gray, K. et al. (2012) "The Moral Dyad: A Fundamental Template Unifying Moral Judgment" *Psychological Inquiry* 23(2): 206-215.
- Gray, K. et al. (2014) "The Myth of Harmless Wrongs in Moral Cognition: Automatic Dyadic Completion From Sin to Suffering" *Journal of Experimental Psychology: General* 143(4): 1600-1615.
- Greene, J. et al. (2004) "The Neural Bases of Cognitive Conflict and Control in Moral Judgment" *Neuron* 44: 389-400.
- 谷美娟 (2009) 「天草の縫製技能実習生訴訟 [技能実習生の訴え]」, 「外国人労働者問題とこれからの日本」編集委員会 編 『<研修生> という名の奴隷労働』, 花伝社: 共栄書房: 18-21 頁.
- Gutierrez, R. and Giner-Sorolla, R. (2007) "Anger, Disgust, and Presumption of Harm as Reactions to Taboo-Breaking Behaviors" *Emotion* 7(4): 853-868.
- Haidt, J. (2001) "The Emotional Dog and Its Rational Tail: A Social Intuitionist Approach to Moral Judgment" *Psychology Review* 108: 814-834.
- (2012) *The Righteous Mind. Why Good People Are Divided by Politics and Religion*, Pantheon Books. (邦訳 ジョナサン・ハイト (2014) 『社会はなぜ左と右に分かれるのか』, 紀伊國屋書店)
- Haidt, J. and Joseph, C. (2007) "The Moral Mind: How Five Sets of Innate Intuitions Guide the Development of Many Culture-Specific Virtues, and Perhaps Even Modules" In Carruthers, P. et al. (eds.) *The Innate Mind vol 3*, Oxford University Press: 367-391.
- Hauser, M. D. (2006) *Moral Minds: How Nature Designed Our Universal Sense of Right and Wrong*, Ecco Press.

- Henrich, J. et al. (2010) "The Weirdest People in the World?" *Behavioral and Brain Sciences* 33: 61-83.
- 平稲晶子 (2009)「丸刈りにされた女たち—第二次世界大戦時の独仏比較—」, 『ヨーロッパ研究』 8: 25-41 頁.
- Kross, E. et al. (2011) "Social Rejection Shares Somatosensory Representations with Physical Pain" *PNAS* 108(15): 6270-6275.
- ノーナレ (2019)「画面の向こうから」, 日本放送協会, 2019年6月24日放送
- 大森元吉 (1972)「禁忌の社会的意義——血忌習俗をめぐる推論」, 『伝統と現代』 1972年11月号: 45-51 頁.
- Price, M. et al. (2012) "Anthropometric Correlates of Human Anger" *Evolution and Human Behavior* 33: 174-181.
- Prinz, J. (2007) *The Emotional Construction of Morals*, Oxford University Press.
- (2008) "Is Morality Innate?" In Sinnott-Armstrong, W. (ed.) *Moral Psychology The Evolution of Morality: Adaptations and Innateness, Volume 1*, The MIT Press: 367-406.
- (2009) "The Moral Emotions" In Goldie, P. (ed.) *The Oxford Handbook of Philosophy of Emotion*, Oxford University Press: 519-538.
- Richardson, P. and Boyd, R. (2005) *Not by Genes Alone: How Culture Transforms Human Evolution*, The University of Chicago Press.
- Rozin, P. et al. (1999) "The CAD Triad Hypothesis: A Mapping Between Three Moral Emotions (Contempt, Anger, Disgust) and Three Moral Codes (Community, Autonomy, Divinity)" *Journal of Personality and Social Psychology* 76: 574-586.
- Sell, A. (2006) "Regulating Welfare Tradeoff Ratios: Three Tests of an Evolutionary Computational Model of Human Anger" University of California Santa Barbara, A Dissertation submitted in partial satisfaction of the requirements for the degree Doctor of Philosophy in Psychology.
- Sell, A. et al. (2009) "Formidability and the Logic of Human Anger" *PNAS* 106(35): 15073-15078.
- Shweder, R. A. (2012) "Relativism and Universalism" In Fassin, D. (ed.) *A Companion to Moral Anthropology*, John Wiley: 85-102.
- Sterelny, K. (2012) *The Evolved Apprentice: How Evolution Made Humans Unique*, MIT Press. (邦訳 キム・ステレルニー (2013)『進化の弟子—ヒトは学んで人になった』, 勁草書房)
- Sternberg, C. R. and Campos, J. J. (1990) "The Development of Anger Expressions in Infancy" In Stein, N. L. et al. (eds.) *Psychological and Biological Approaches to Emotion*, Lawrence Erlbaum Associates: 247-282.
- Tooby, J. et al. (2008) "Internal Regulatory Variables and the Design of Human Motivation: A Computational and Evolutionary Approach" In Elliot, A. (ed.) *Handbook of Approach and Avoidance Motivation*, Psychology Press: 251-272.
- 植原亮 (2017)『自然主義入門 知識・道徳・人間本性をめぐる現代哲学ツアー』, 勁草書房.
- de Waal, F. B. M. (1996) *Good Natured: The Origins of Right and Wrong in Humans and Other Animals*. Harvard University Press. (邦訳 フランス・ドゥ・ヴァール (1998)『利己的なサル、他人を思いやるサル：モラルはなぜ生まれたのか』, 草思社)
- 安田浩一 (2009)「外国人研修・技能実習制度は現代の奴隷制度」, 『外国人労働者問題とこれからの日本』編集委員会 編『〈研修生〉という名の奴隷労働』, 花伝社：共栄書房：33-60 頁.